



みんなと TUNAGU

～ 亡き夫への想い ～

平田 美鈴

私達夫婦は、今年の4月で結婚 42 周年になります。ただ二人揃って迎えた結婚記念日は 38 回でした。夫は 4 年前天国へ召喚され、私はひとりぼっちになりました。

新婚当初は夫の両親、義姉と 5 人暮らしで、私の 10 年間は両親の看病の日々でした。2 人が交互に入院された時は、病院に泊まり込みの看病をし辛い思いをした事もありました。でも今あの頃を振り返ってみると 30 代の若いうちに両親の看病をさせてもらった事に感謝しています。

義姉も家を出て 1 人暮らしを始め、私達は結婚後初めて夫婦 2 人水入らずの生活が始まり、数年は楽しい日々を過ごしていましたが、夫が 53 歳の時突然吐血し救急搬送されたのです。夫はお酒が大好きで、毎晩お酒を楽しんでいましたが、Dr ストップがかかり生涯お酒を飲む事はありませんでした。それからの夫は入退院を繰り返す事になりました。私は仕事終わりでも 1 日も欠かす事無く見舞いに通いました。それからは結婚記念日を病室で迎える事もあり、その度に『来年こそは元気で結婚記念日を迎えられるようにしよう』と約束しました。

夫の病気がだんだん厳しい状態となっていく中、新型コロナウイルスの発生で見舞いも出来なくなり、洗濯物の受け渡し時に看護師から状態を聞くだけとなりました。夫が苦しい時に顔を見る事も出来ず、そばで声を掛ける、手を握り励ましてあげられない事が辛くて辛くてたまりませんでした。

夫の最期は自宅で看取りたいと思い、義姉さん方に相談しましたが『家では無理』の一言で反対されました。それでも私は妻として、看護師として自宅で看取りたいと言う思いは諦められず、最後の面会をさせてもらった時（夫の意識はほぼ無かった）『他の病院に移る？』『家に帰る？』と聞くと『家に帰る』とか細い声で答えてくれました。その声が私の背中を押し、必ず家で看取ろうと決心し準備をしましたが、夫は自宅への退院を予定していた前日に、天国へ旅立ったのです。

そして私の心は空っぽになり、辛い日々を忘れさせてくれたのは仕事でした。看護師としての仕事をしている時だけは、悲しみや辛さを忘れる事が出来ました。

今でも夫の事は頭を離れる事はありません。あれもしてあげれば良かった、これもしてあげれば良かったと後悔ばかりです。

今はただあなたに逢いたい、声を聞きたいと。夢でもいいから逢いに来て欲しいとあなたへの想いはつのるばかりです。

それでも職場の皆と楽しく仕事が出来ている事に感謝しています。職場のみなさんいつもありがとうございます。



みんなと TUNAGU

～ 私の趣味 ～

鈴木 真美

私の唯一の趣味は、スノーボードです。コロナ前は、スノーボードのシーズンになると、友人と北海道へ行っていました。

長野・岐阜・山形・北海道と行きましたが、北海道の雪質にはまり、毎シーズン北海道に行くようになりました。ニセコ・留寿都・キロロ・富良野と北海道の各地に滑りに行っていました。

北海道は雪質もさることながら、食べ物もおいしく、毎年楽しみにしていましたが、コロナと共にウィンタースポーツ・旅行に行けなくなり数年がたちました。

また冬の北海道で、ウィンタースポーツを楽しめる日をこころまちにしています。

